

## 山中で子どもが拾った古銭「開元通寶」から思いを巡らす「道」について

吉池光則

一昨年の大池自然の家キャンプ場での事です。5年生の宿泊行事、一泊二日の二日目の朝の出来事。K君が古銭らしきものを森の中で拾ったと言って持ってきて見せてくれました。大勢の仲間たちも、なんだ、なんだと大騒ぎ。銭貨の表面には「開元通寶」の文字が読み取れました。



銭形平治でも有名な「寛永通宝」をはじめ、昔から私鑄銭も多かったと言われますが、「開元通寶」が本物なら唐時代の貨幣です。このような山中で古銭が発見されるとは驚きでもありましたが、大池自然の家の脇には「東山道支道」が通っていたという表示板があり、古道の跡として歴史的な検証がされています。表示板通り、間違いなく「道」は通っていたのだということをこの時実感しました。

東山道といえば東海道と共に重要な奈良期の官道です。信濃国分寺の方へ向かっていた道が本道で、大池キャンプ場内をその支道が通っていたということです。奈良の都から奥州へと向かう東山道は「御坂峠」より長野県に入って伊那谷を北上し、松本から筑摩山系の山越えとなります。旧四賀村、現松本市錦織からウェストンも通った保福寺峠を経て、現在の青木村から信濃国分寺へと東進するのが本道となります。東山道の支道はその錦織から現在の国道403号ルートに近い方向へと分岐し、「立峠」を越え、北東方面の坂北や麻績へと進みます。そして聖山を含む聖高原を巻くように、奈良期には冠着山の北麓の古道（現在古峠と呼ばれている）、冠着山の北西のコルを越えて更級の御麓（彌勒）から羽尾に出て、千曲川に接岸します。平安期や鎌倉期の地震等の災害で道が失われたと考えられる山中の峠道は、鎌倉時代には「一本松峠」、室町時代には「猿ヶ馬場峠」越えが主道となり現在に至っています。

東山道支道は、江戸期には中山道との分岐点以降は専ら善光寺西街道と呼ばれるようになり、学区内にも「一里山」とか、「桑原宿」（松代藩）、稲荷山宿（上田藩）、北国街道側への渡りのための「舟繋ぎ石」等の史跡があります。過去からの歴史が積み重なった土台の上に私たちは生きているということを、待井先生の絵画作品を見ながらあらためて感じ取ることが出来ました。

令和3年11月30日記す

- 参考文献
- ・理科年表 平成3年 1991版 1990.11 丸善出版
  - ・祈りの道 善光寺街道四百年 十七宿 歴史旅ガイド画集 2015.9 マチイ出版